

薄暗い、こんなアタ小屋で
何が静養だッ
五ヶ位の牛乳で
何が養生だッ

× × × ×
學校へも出されねえで
八年間此の工場で働き続けた
そしてお前は何を待た?
お前は生産者であつたのに
たつた一枚の絹の着物が着られなかつた
「工場地獄で主任が鬼で
廻る運轉火の車」

お前は、いつも
喧嘩の中へこうた、きつてた
工場のみんなが云つてるよ
きよ坊の病氣は千服の薬よりは
復讐の響が一番だつて。
工場の設備が不完全だから
背い顔した人が毎日激増してゐるんだ
矢張、きよ坊のやうに死に近づいて行
くんだ

あまりに乏しく、我馬は老ひ果ててけ
り
荷を賣りてかへる道々、慇しきもの數
ありてあぢけなき思ひせし……こも
あり
されき、のぞみすくなき、この日頃
母上と只二人、山に暮し
のぞみ少し、このひごろ
みのる おかだにおくる

島 唐 兒
彼は虚偽な虚飾を、に捨てた
彼は愛するゾイオリンもた、きつてた
彼は愚なる磁場を乗り越えて
堀立小屋から雄大な原ツバにさび出し
た
彼の心臓は精養軒よりも赤く燃え
彼は農民と労働者の先端に起つた
彼は全く人間の呻き泣く聲に醒された
のだ。

おきよ坊よ、
今夜は集會だよ、
そして明日はデモなんだ
油くさい死水なんか慇しがらないでく
れ
お前の病氣から刺戟を受けて
女工達のデモ振りを
心持ちよく見てゐてくれ

夜の おもひ
—(元)—
シドノマイケル
小松のかれ枝をきり
おち葉かきあつめ、一束、二束と草繩
をかけて、ひねもす山に働ければ
朝ぎりひかぬまに町に出て、明日こそ
は良き道に賣らむ

港近くは良家下町は問屋たち並び、山
の手は色柄なれば、夕方にせむ
町にゆかば、みめ美しき人の多く見る
もの面白し
この山家あきしにあらぬき、わが棲屋

落 日
渡し 澄 昌 月
一、わたしのすきな秋草よ
もう秋の日は落か、り
光りはな、めになりました
おまへの影のながいこ
二、夕日の中の秋草よ
まあ何さいふ美しいさ
虫の啼くのも一しは細りて
秋も日毎に深み行く

●新年一週年紀念號原稿募集
小説 原稿紙(四〇〇字詰)
二十枚以内
戯曲 同
詩、歌、隨筆
切 十二月十日限
宛名 本誌編輯部

である眠るこころである、決論をつけ
てついで一年あまりの嘘をついて来たの
である、催促する雨氏はおそらく筆不
精の奴だと思つて居るにちがいない、
毎日筆を採る商賣でありながら
△
如何な鐵面質の私もそう、嘘ばかり
云へなくなり——それに私を知る多く
の人たちにもさかく無沙汰勝ちなつ
て居るので丁度い、この生活断片を讀
んでもらひ「野郎も生きて居るなと思
つてもらひたく書いたのがこの隨筆
である。(十月六日)



歌

若き同志におくる
磯田 沙 路
ふるさとの若い同志よ、獄まで階級
戦に強く進まう
反逆もしたくならうさこのくらしいつ
になつたらよくなるんだらう
百姓がいやだま都あこがれる少女よ親
は汗にぬれて
戦つて戦つて同志よ、俺達はこのみち
めさを破つてゆかう
俺達の節を守つて焦せらずに強く生き
よう若い同志よ

秋 日

遠山 麗 子
寂しき日、淋しき日とぞ口さむ、我
が心ろねのいさほしきかな
如何なれば冷たき體若はして、我れの
心をチツト見つむる
自らのかたく友の心知る故に、去りけ
る君も恨まざりけり
しみ、み、み糸のまつれのさけぬこみ、
人の心のさけぬをかなしむ
何がなし大聲あげて呼びいたし、われ
も我が身のやるかたもなし

須 満 子
資本家の犬にはなるな労働者、うず巻
く社會の自己を見出せ
汗！汗！汗！こんなに汗が流れて、
俺の身體はやせこけて行く

發禁に抗して

原 島 瀆
あゆる暴壓に
抗して戦ふ俺達だ
發禁だけを恐れるものか
發禁を
俺達の運動が阻止できりや
太陽が西から上るさいふものだ
血を血で書く
俺達の上毛大衆を
×旗の下に死守するぞ
發禁に抗して
死守する俺達の上毛大衆を
×××××で築め上げろ！
大衆の×××が凝集した
相統がこの拾遺月號だ
氣絶するなよ
何もかも俺達から奪はうとする
彼奴等に叩きつける×××！
それは上毛大衆だ

俺の心

齋藤 代志 緒
貧乏が嫌だ云つて逃げ去つた、友の
ワイフの馬鹿に呆れた
右の手に百万圓の金を持ち、左にシエ
ンの妻を抱きたい
金がないもうそれだけで澤山だ、その
先聞けば氣が狂ひだす
二十八頁よりつづく

私はかぶりを振つて、運ばれたビー
ルを機織前にのみやらも、うな垂れて
了みました。考へてみるに、あのおく
みさか云ふ娘は藤澤君をおびき寄せ
爲にあの素的な手紙を書いたのでは
ないか

そして切手を貼る三三錢損だから鼻の
下の長い相手に不足税をせよとせよと
に仕くんだんです。喧嘩には自信のあ
る私だからよかつたもの、本物の藤
澤君だつたら不具にされるか半殺しに
されたであらませう。幸か不幸か私が
邪魔してしまひました。あ、可憐な
企劃したる貞操擁護ブル息子懲戒事件
をベチヤンコにしたのみならず、彼女
の父親に脅威投げの一手を食はせてし
ました。
「お兄さん、さうして、そんなにぶさ
ぎ込んでゐるの？」
「俺ア女が好きだもんで……」
「さう、それで？」
「だもんだから、出しや張らなくも
いいさけえ出しや張らんだ。これも助
平だから……」
「まア、女が好きで助平で——頼もし
いわねえ」
「何く？」
「しな垂れ掛つて来た女をいきなり平
手で蹴りつけるさ、私は外へ飛び出し
ました。もう道は水つてゐました。月
が登つて、清冽な光を投げてゐます。
赤城山が紫の輪廓をくつきり見せて
ゐました。(完)

「お兄さん、さうして、そんなにぶさ
ぎ込んでゐるの？」
「俺ア女が好きだもんで……」
「さう、それで？」
「だもんだから、出しや張らなくも
いいさけえ出しや張らんだ。これも助
平だから……」
「まア、女が好きで助平で——頼もし
いわねえ」
「何く？」
「しな垂れ掛つて来た女をいきなり平
手で蹴りつけるさ、私は外へ飛び出し
ました。もう道は水つてゐました。月
が登つて、清冽な光を投げてゐます。
赤城山が紫の輪廓をくつきり見せて
ゐました。(完)

勇敢なプロレタリアートの味方だ。
此の事は、前に讀んでもらつた様な手紙を受取つて後、
俺が彼女の處を直接訪問する事によつて、彼女がその生活
を親しく語り合ふ事によつて實證的に示されたんだ。
俺は、全く四年振りに、親しく彼女と握手し合ひ、肩こ



艶書事件

素地文村

半農生活をしてゐる私は、其日未だ晝飯時には早かつた
けれども、常に朝かな朝だつたので気分もよく、従
つて仕事に馬力をかけたので、豫定の桑畑をうなひつくし
てしまつたので、エンガの土を丁寧に落し、空手瓶をさげ
て歸宅しました。

一體此國の農夫は働き過ぎます。その弊益々益して行
くのです。過勞、年毎に加はる不安に憔悴して、彼等
はいよく憂鬱に陥つて行くのは理の當然です。最近私は
『ローの「森間生活」』を讀みましたが、その中で著者は、
人間は一週間の中六日は好きな事をして遊んで、あこ一日

肩こをがっちり組み合つて抱擁した。昔の戀人同志として
ではなく、私とプロレタリアートの果敢な闘争の、花々し
い戦線の上に、同じ歩調で前進する若き二人の同志とし
て。(一九二九、九、三〇)

を働けば立派に自給生活が出来るのである。ミワールデン
湖畔に於ける著者自身の實験に依つて證明してゐる程です
私は半日働きました。あこ半日は讀書したり、雜誌に耽つた
りするのが癖です。
其日野良から歸つて来るに、妹は私の姿を見るより早く
手を打つて叫びました。

「素的、素的! あんちゃん、ラヴ・レターだよ。鎮守の森
へ来て「君戀し」の唄を歌つて下さい!」
「まだ十六のくせに、いやにませたおきやんな彼女には手
をやいてゐる私です。かついてゐるな!」と思つて、黙つ

買へるんに!

私はキザミを詰め乍ら母に言ひました。
「ふんぞつてな。九八やんが、彼へ行つて訊いたけん
ぞ、藤澤生二言ふ人は居ねえちゆうし、藤澤先生の先の字
抜かしだんだんべつて云ふから受取つたんだに。ふんぞに
英通々しい!」

「配達屋なんか責任をのがれる爲に、こんな事でも言つて
押しつけろやア」
「宮郷の函から出たんだちゆうし……」
「ふんぞだんべかかな?」

成程私は父の亡くなる一年前まで、宮郷村で代用教員を
してゐたことがありました。で生徒から、二錢切手を貼つ
た封書や、表まで文句の書かれたハカキな紙を時々貰つて
よく手摺つたものでした。だから此の妙な手紙を留守中に
母が受取つた三云つてもあながち無理もありません。

其日の午後、讀書するでもなく机の前にごろ寝をべ
つた私は、自然考へが手紙の事に落ちて行くのでありまし
た。
彼女を執拗に追ひ掛け廻してゐる男があつて、毎夜の様
に彼女の家のあたりをうろつき廻り、所謂ハアモニカで「君
戀し」の唄を吹いたりして、牝鹿を慕ふ牡鹿のやうに森に
烟に、癒されぬ戀にもだえてゐるに相違ありません。彼女は
愛のこひの云ふより、その男のしつこさが不氣味だつ

たのでせう。彼は手紙を書くやうになりました。それには
「茂呂村 藤澤生二」署名して出したのです。(それでも何
の効もありませんでした。もう万策のつきだ藤澤君は、絶
望して諦めたのであります。)

「乙女心は妙なもので、自分に言ひ寄つて来る者を拒み
つづけることに不思議な誇りや快感を覚ゆるものです。こ
ころがその男がバツタリ足をつき、何だか張り合ひ掛け
て、果は心淋しくなるものです。」

淫蕩的な月が蒼白く空中に引つ掛かつてゐる夏の夜、農
村の若い男女が、狂狂しく相手を求めて羽搏きます。過
勞、營養不良に瘦せ細つたバツタリたいな彼等は、自棄
的に飛びはねて、一晩幾人娘を××けたなご法螺を吹き
ます。それが秋口になつて、豊年祭りの頃になると、皆相
當の相手を得て結婚に進むのであります。

又、人知れず孕んだ娘はそれと相手に訴へ、男はひげの
伸びた顔を憔悴させて善後策に頭をしぼるものもあります。
だから秋は嫉妬まじりの話題が賑はしい季節なのです。だ
が、吹く風は寒さを含み、木々の葉も霜枯れて、早や赤城
嶺に雪の噂が立つ頃の晩秋から冬へかけて、バツタリロ
マンチックな色彩は缺けて、田園は再び死の様な沈黙と飢
餓とが暗く凍てつくばかりです。

「驅の調子もぐつと落ちて、食へる物もおしく、蠶蚕
臭かつた脚もすつきり實つて、彼女は元氣だつた。そして

い程纏て、土を破つて萌え山た水々しい隠花植物みたいな
ものであります。私は段々彼女に興味を持つて来る
自分に氣附きました。會つてみたい氣持が強く私を動かす
のでした。牧歌的なエロチック・シーンに魅力を覺えたの
でせうか? しかし會つて其娘をさうしやう云ふ心算はな
かつたのです。さうだ、神々しい程無智な彼女に一寸
ていから會つて、理由を話してさつき引き上げて來や
う。遂に私はさう決心しました。噫、この氣まぐれから私
は後で救はれない自己嫌悪に陥るのです。

しばらく放つたらかしてをいたハモニカをやうやく神棚
の上に見つけ、水を掛けて埃を落す調子をしらべてをき
ました。
十五日の當夜、私は鳥打帽を被つて、麻裏草履をひつ掛
けて家を出ました。町を越えるに宮郷村です。

杉の木が少しある其鎮守には、神主が居るわけではなく
春秋二回の祭日のぞく外は雨の日に子守女の遊び場ま
なり。拜殿は雀の糞で白く汚れてハモニカを吹き鳴らしてゐた
でせうか、その時足音が聞えたのです。私は疑ひを思ふこ
らしました。心臓の動悸が高まります。黒い影が近寄つて
來ました。が、見るに人違ひでした。綿入れぬ、を着た
黒い顔の男なのです。私が道をよけるに、彼はいきなり私
のむなぐらを捉へるではありませんか!

淋しかった。男がこひしかつた。振つた藤澤君がこひしか
つた。そしてあの手紙を書いた……と思ひます。
一方本物の藤澤君を物色してゐるに、自家の三軒置いて
隣りに同姓のブルジョアがあります。其處の息子で、中學
を出ても専門學校へ這入る程の學力もなく、趣味に生きる
三稱してハモニカで流行ぶしを吹いたりマンドリンを近所
迷惑に掻き鳴らしてゐる女蕩しの青年であります。彼に相
違ありません。此村で藤澤を名乗る家はまことに少いので
すから。さう決つて、開封した物を見て以來、私一家
の者に對して抱く彼の羞恥や怨恨を考へるに易く手渡すこ
ともありません。

畑路なごで猥褻な行爲にある者があつても、やつちよるな
ご微笑んで大目に見逃すのが村の兄弟の氣象です。そんな
男でしたら此の戸まきひした手紙も無神経にボンミ手渡す
ことも出来やうし、相手も心安く受取るてあります。受取つ
た相手のバツの悪さを想ふに渡せないのです。

此の次に出す時には切手を貼りますから今度はかかんべん
して下さい、と書いたり、藤澤生の生ひ字を名前だと思ひ
こんだりしてゐる彼女は乾度貧しい家の娘で、教育も尋卒
そこそこなものであります。色白な彼女は、無智云々は
人間はなれのした程無智で、例へば、草深い田舎のみに見
受ける、貞操觀念の全々ない、それである、危ぶなかつか

「何ががんですか?」
私の聲は震へてゐました。
「何もかもあるけん」
「何と云ふに、黄色齒をむき出して彼は怒鳴りました。同時
に厭な口臭が毒氣の様に私の顔にかゝります。昂奮した彼
は一層強く両手で私の咽喉を緊めます。
「ひ、人違ひしてらうめえ」
「何が人違ひだ。おちがおくみの尻追ひくさつて!」うぬ
らみてえなドラ息子にキズもんなされて堪つたぜ!」
誤解、恐しい誤解であり、天罰でありました。辯解なき
してゐる暇もありません。彼は緊め切つた咽喉を片手で抑
へて、右手で私の頭をさやさやさうしてゐます。原始的
本能も云ふべき争闘心がむらむら私の胸にこみ上げて
まゐりました。引いてゐる彼の方へ、一歩進むと、彼は力ま
けがして、よろめきました。その隙に素早く身をかがめる
に、彼の片手の下に自分の肩を入れました。ヤツ、三脊負
投げは見事に成功した、彼は絶壁から落ちた佛拂みたいに
轉けました。ミ、草履をぬいだ私はそれを腰にはさみ、尻
をからけて逃げ出しました。
息せき切つて町まで來るに、私はこゝろの街角のカフェー
にしげこんだのです。
「あら、兄さん喧嘩したの?」
「うんにや」

昭和四年十二月十六日印刷 昭和四年十二月十八日發行 毎月一回發行

第二卷第十號 一部金十錢

十二月號



週一週年紀念號

上毛大衆

JYOMO.TAISHU

上毛大衆 昭和四年十二月十六日

方角の第三日曜の休日を丸潰しにして激しい労働で疲

れた身體に鞭打つて、忘れて了つた字を思ひ出し乍らやつ

女工になつた妹からの手紙

大野 金 治



(1)

ブルジョアのな月並な前置はやめます。かう云ふ一兄さんは、

『おや！ 貴様何時からそんな言葉を使ふやうになつたんだ？』

『不審に思ふでせう。ですがその不審の色は此の手紙を讀んで行くに連れてだん／＼微笑に變り、しまひには

『それでこそ俺の妹だ！』

『喜んで叫ぶに相違ありません。その有様がかうして遠く離れても眼に見えぬやうです。併しそれに引替へて『兄ばかりだと思つたら妹まで社會主義者になるなんて、由緒ある先祖に申譯がない！』

『さ、こんな事を云つて、父や母が兄さんを困らせるに違ひない事も想像されます。けれど此の手紙をよくわかるやうに讀んで聞かせたら、さつ／＼父や母でも私達が正しい事をしてゐるのださ少しは考へてくれると思ひます。さうな

れば折角の第三日曜の休日を丸潰しにして激しい労働で疲れた身體に鞭打つて、忘れて了つた字を思ひ出し乍らやつつ。此の長い手紙を書いた私の努力も幾分むくいられるさうなものです。

改めて書くまでもなく、私が村を出て遠い此の町へ来て糸挽屋の寄宿舎に女工生活をするやうになつたのは、今年の正月からです。

父や母が『由緒ある先祖の手前血を吐くやうな思ひで待つてゐた儘かばかりの田畑も去年の秋期限が切れて皆な借金のかたに取上げられた上にまだ利息が残り、『由緒ある祖先を持つ家』が小作人さまで落ちぶれてしまつて、親子四人が百姓をして見た處が、残つた利息のその利息さへ稼ぎ出せない事がわかつたからでした。

今思ひ出せば、馬鹿々々しい話ですが、此の工場へ来るまでは、私まてが何うして貧乏するのとも知らずに、『由緒ある先祖を持つ家の名譽』のために父や母と一緒に

度々兄さんに警察から眼を付けられる様な危ない事からは身を退くやうにさる願ひしたものでした。去年の秋、長い拘留から歸つて来た時などは親娘三人が泣いて運動をやめるやうにこ謀めたのを今でも覚えてゐます。あの時なご、親や妹に涙をこぼさして物を言はせて置き乍ら唾のやうに歌つてゐる兄さん何んなに頑固な親不孝者と思つた事だせう。父や母は恐らく今でもさう思つてゐる事だせうが、その當時は私も警察へ引ッ張つて行かれるやうな事をするのは、例令何んな事でも社會のために悪い事ださ考へてゐたのです。だから、こんな不逞な親不孝な兄の許に大切な親を残して遠く此の町へ来る事を非常に悲しく心許なく思つたのです。何てまア、私はブルジョア的な孝行娘だつたのでせう。

それから又村を去る日、停車場まで送つてくれた兄さんが、道々村の友達にあつて、

『何處へ行んだ、お揃ひで！』

『何アに妹は今年から町の工場へ締挽に行くんでね、今送つて行く處さ』

なご、少しも遠慮なく、ズバ／＼云ふのを聞いてゐるに何だか、急に落ちぶれた自分に引け目を感じて、脇の下に冷汗をかいたものでした。

『村の人達には誰にもあはずにコツソリ行つてしまひた

りやア驚ける上がつたりだ。尤も健康保険醫云ふ奴は別だがね』

『さ、萬事が此の調子です。だから皆ながお書休みなごには、熊さんの處へ行つてお喋りをお願いします。

夏になるさよ／＼ある事、此の間沖編から來てゐる小母さんが食當りから下痢を起して寄宿舎に寝てましたが、何しろ便所は工場まで行かなければないので大變な騒ぎでした。私達は見兼ねて熊さんの處へ相談に行つたものです。すると熊さんは云ひました。

『こんな事は俺の處へ相談に來る事はあるめえ、奥主人のゐる處の事』にはあんなに便所に近い好い座敷が空いてゐるぢやあねえか。あそこへ置いて貰つたらいよ』

成程と思つて晝休みに恐る／＼主人の處へ交渉に行つたのですが、私達はしほれたり怒つたりして歸つて來ました。主人が承知したけれどお喋りして變に綺麗好きなお神さんが出て來て、何だ彼ださ云つて、まるで肥桶でも擔ぎ込まれるやうに思つて承知しないんです。熊さんがそれを聞いて、

『よし俺がひき受けた。あんな廣い家へ夫婦三子供三三人きりて任てるやがつて、人を馬鹿にしてゐるやが、女工なんて人間ぢやあ無え思つてゐるやがさうだ、あいつらは――俺達のお陰で贅澤してやがつてさ』

こにや／＼しながらも怒つたものです。その晩久しぶり

い』

みんなにさう思つたか知れませんが、併しこんな考へは此方へ來てから間もなく、工場の煙突から出る眞つ黒な煙さ一しよに何處かへ吹ッ飛んで行つて、今の私の胸には唯機關にくらべられた石炭のやうに赤く燃え上る團志があるだけだ。兄さんの喜びさうな言葉でせう！

(2)

手紙なき書き付けのないものですからもう疲れて來ました。だから、女工生活が何んなにみぢめて苦しいものだからなごは、來月の第一日曜に又ゆつくり書きて、何うして私の心が機關にくべられた石炭のやうに赤く燃え上るやうになつたかを書きます。

火夫に清さん云ふ人がいます。最近雇はれたのですが丸い顔が髭だらけで眼が小さく團體が大きく重さうなので皆んなが『熊さん』と呼んでゐます。かなり無駄口をさく人ですが、併しその無駄口の中には、何かしら私達が日頃薄ぼんやりと感じてゐる生活上の不平や不満なごがズバリ／＼と軍の物の物を出すやうな正確さで現れてゐます。

例へば誰か、

『芳ちゃんの病氣つたら却々癒らないわね』云へば、熊さんが、

『さうよ、澤庵三馬の小便見たいな味噌汁だけで病氣が癒

て此の町へ來た歌舞伎芝居さやらへ主人夫婦が子供を連れて見物に出掛けた留守をねらつて、熊さんが小母さんを寄宿舎から主人の家へ移してしまひました。寄宿舎の三十人の喜びはトキの聲の様です。かうしてしまへば流石のお神さんも何ごも云へません。

處がマア、嫌ぢやありませんか？ お神さん云つたらその晩子供が便所へ行かうとするさ、

『坊や、工女の使ふ便所へなんか汚ないから行くものぢやありません』

さ、病人に當て付けがましく云つて、一町も離れてゐる共同便所まで夜中に二度も駆けつて行くとつて――無論自分自身も共同便所まで用を足して行き、旦那も行くやうにさ、めるんでつてさ、それに就いて面白く話がありました。何しろ子供さ云つたら一寸も我慢が出来なくなるとまで遊びに紛れてゐるのですから、共同便所へ行くまで堪へ切れなくつて途中で歩きながら粗糞をしてしまふんです。まるで漫罵ぢやないの？

『まあ仕様がなないのね』

さ云つて、往來の眞中に、行儀わるく垂れた子供のウシチを赤い顔して眺めてゐる情で返つた立派な奥様ぶりを想像して下さい。

だと思つてゐる處なき滑稽ぢやないの。彼の人達の綺麗好きなんて大抵こんなものでせう。

(3)

こんな事があつてから問もなく、世間は金解禁ミやらの問題で喧しくなりました。併し

此の問題は私達の生活ミは何の縁もない高級な政治上の事ミしか思はれないので——尤も金解禁ミ云ふことが根柢からわからないのにも依りますが——あまり心を惹付けられませんでした。唯、緊縮だ、節約だミ熱病や見たいに世間の人の騒ぐのに釣られて、わけもわからずに

「活動見に行かないの？」

「駄目々々緊縮ぢやないの？」

「五錢宛出し合つてお菓子買はないの？」

「喰ひしんぼ！節約を知らないの、五錢處かおかしくつて

てな調子。熊さんミ来たたら又此の人らしく

「何が緊縮節約だ、俺達にこれ以上ツマしくやれミ云ふのは三度の飯を二度にしろ云ふのと同じだよ、金持をやせさせねえために俺達をやせらかさうてえのが奴等の手なんだ!!」

ミこそ味噌にけなした上、

「金解禁ミえ怪物は俺も今友達ミ研究してゐるんだが、政府のやり方ぢや、何うも一番俺達が見せられさうだナア。何んでも賃銀は引下けられさうだし、仕事は縮められて失業者が殖えるらしいア」

ミ色々な例を引いて政治ミ私達の生活ミが例令何んな小さい事でも直接関係のある事を教へ政治ミ云ふものを遠い所にある火事のやうに考へてゐる私達をニヤ／＼笑ひ乍ら馬鹿にするのです。併し馬鹿にされ乍ら私達は何時の間にか熊さんの話を好感をさへ持つて聞いているました。今から途二三日前の或る朝です。始業にはまだ一時間も時間のある頃、私はいつになく小用を催して便所へ立ちました。さつきも書いた通り便所は工場にありました。秋ミは云へまだ九月の事なので、もう夜が明けてゐる。用を達して丁ふミ少し早いが寝ても仕様がなないと思つて、早起の熊さんへ（此の人は火夫で早く起きます）の處へ行つて見ました。熊さんは、黒くなつたシャツミズボンだけて石炭を掻き廻す太い鐵の棒を右手に握つて、左手には一握みの小さい紙切を持つて、それをよんでゐました。

「熊さんぢやなかつた清さんお早う、何、それは？」
「あ、房ちゃんか？ こんな早いのにもうみんな起きてるんかい？」
「うゝん、私だけ、何よ、それは？」

握らして、太い力のある手で私を工場の中へ引つぱつて行つたのです。

クマさんの顔に押されたやうな氣持で夢中で私はビラをまいりました。流石に手がふるへて、ビラがクマさんのやうに一枚々々手際よく握めなかつたのを覺えてゐます。みんなまいりしてしまつて工場隅にほんやりしてゐるクマさんです。太い指で私の頬を笑ひ乍ら突つて云ふのです。

「房公しツかりしろよ、びく／＼しちや駄目だぞ！今夜俺ミしよに友達の家へ来いよ、お前の兄貴がしてゐる事や俺達してゐる事に就いてわかるやうに話してやるから——さ、早く寄宿舎へ行つて白ぼけてろ！」

赤に燃えたクマさんは、機關室へ歸つて、太い鐵の棒で眞ツ威勢の好い起床汽笛をば／＼鳴らしてしまつた。大きなアキビを一つして、さして、隅の腰掛にかけて居眠りの姿勢をしたものです。

(4)

およその事は、もうわかつたてせう。長くなりますからあこ三行でやめます。

氣の弱い工場主はあのビラで私達が可成り動搖してゐる事を恐れて未だに賃銀引下を言渡さずにゐます。だがキツトその中に一騒動ある事せう。

1929.11.23

『上毛大衆』昭和五年一月号掲載文芸欄

昭和五年二月十四日印刷 昭和五年二月十五日發行
第三卷第一號 一月號 一部金十錢

上毛大衆

プロレタリア文藝號

JYOMO TAISHU



説小 下 獄

渡良瀬 潤

其年も、もう秋の末で本部の前にある樺の木の葉はずつかり黄色く色づいてゐた。池田ミ山村ミは、火鉢に向ひ合つたまま、口もきかず、思ひ／＼に外の景色に見入つてゐた。いつもしんねりむつ／＼してゐて、口数もきかない山村は戸外の景色も見飽きたといふ様な振りで、おもむろに池田の方を振り向いて口を切つた。

「何んミか決まりそうなんだア」
「何んミかぢやない、上告棄却ミきまつてるよ」池田も向き直つて答へた。

「もう何時這入つてもいいさ、密柑も食つたし、活動も観たし……」山村は獨言の様に言つた。

子供らしい言葉が、腹の中では可笑しかつたが、又これから入獄しなければならぬ山村の身の上を考へるミ、其言葉が却つて淋しい様にも思はれた。

池田ミ山村ミは、或る治安警察法違反事件に連座して、保釋で出て居るのであつた。事件は今大審院に廻つて居るので、其最後の判決を待つてゐるのであつた。併し、其最後の判決は、無論上告棄却の判決であつて、近いうちに入獄しなければならぬミ云ふことを二人共覺悟してゐた。

「何んミかぢやない、上告棄却ミきまつてるよ」池田も向き直つて答へた。

「もう何時這入つてもいいさ、密柑も食つたし、活動も観たし……」山村は獨言の様に言つた。

るる者や、分離されて軍法會議の方へ廻つて、既に服役して居る者なきあつて、今度上告棄却にされれば、結局池田も、山村も、もう一人川田といふ同志三人だけが残るわけになつてゐた。刑は三人共、禁錮七月、未決拘留日數六十日通算といふ控訴院の判決になつてゐた。

三人はそれより入獄の準備をした。密かんの好きな山村は這入れば食へなくなるといふので、毎晩の様に密柑を買つて来ては食べた。又、他にこれいふ楽しみを持たない二人は、友誼を誘つて、よく活動親に出掛けた。それに池田が妻子まで引連れて、この農民組合縣聯合會本部へ住み込む様になつたのも、一つの入獄準備であつた。

池田の家は、其縣の北部にあつて、中流の農家だつたが池田が事件に引懸つて收監されるや、頑固で百姓氣質の池田の親父は、倅が刑事事件に引懸つた事を、甚だ面目ない事として非常に怒つた。そんな工合であつたから、惹いては、それが嫌である池田の妻の方へもあつたから、惹いては、金工面をして貰つて差入れをしたり、辯護士との交渉をしたり、今年生れたばかりの二番目の子を背負つて、同志の間や、其他あちこち飛び歩いた。池田が未決生活六ヶ月の間は、若し刑が決つて池田が入獄すれば、又其留守中面倒な家庭の中に在つて苦しまねばならない。其處で池

田の妻は、池田の入獄中だけは家に居たくないといふのであつた。池田も又、こうした家庭に妻子を残して置くことは氣が、だつたもので、何んか良い方法は無いものか考へてゐた。其處へ恰度農民組合本部に居た吉田といふのが、他へ行く事になつたので、差し當り本部の留守居がなくなるわけになつた。其處で、それを幸に池田が引移るこゝになつたのである。そこへ又、獨身の山村が同居して、組合の事務を手傳ふこゝになつた。山村は池田より二ツ年下で、或る旅館の息子だが、彼が大學生二年の時、事件に引懸り、大學の方もやめになつてしまつたのである。山村は筋力少し悪るいので、入獄前に静養する筈だつたが、組合の方の仕事が多かつたので、なかく體を休める暇はなかつた。

けふは、久しぶりで池田と山村と二人が揃つて、のんびりした氣持ちで火鉢に向ひ合つて話すこゝが出来たのである。それから幾日か過ぎた或る晩であつた。池田親子と、山村が貧弱な夕飯をすましてから、火鉢に向つて世間話をしてゐる。池田の、大きい方の、尋常一年に通つてゐる子供が、一枚の書用紙に描いた繪を持つて来て、

『父うちやん、けふは學校で寫生をしてきたよ』といつて其繪を池田の膝の上へ置いた。見るに、其繪はクレヨンで

『僕なんか、こんなこへ這入らないよ』正ちやんが言つた。

『だつて大學つて言ふんだよ』

『そちやんやないよ、泥棒やなんか悪い事をした人が這入るんだつて、先生が言つたよ』

『正ちやん、この空の方に描いてあるのは飛行船かい？』

『それは山村さん雲だよ』正ちやんが答へた。

『それは山村さん雲だよ』正ちやんが答へた。

『それは山村さん雲だよ』正ちやんが答へた。

『それは山村さん雲だよ』正ちやんが答へた。

『それは山村さん雲だよ』正ちやんが答へた。

『それは山村さん雲だよ』正ちやんが答へた。

『それは山村さん雲だよ』正ちやんが答へた。

『それは山村さん雲だよ』正ちやんが答へた。

それから、池田は妻と相談の上、只東京へ山村と二人で勉強に行くのだと云ふ事にした。そして、それから折にふれては、父ちやんは近いうちに山村さん、東京へ行つて、むづかしい學問を勉強して来るのだから、正ちやんはよく母あちやんの言ふ事を聞いてるんだよ、なご云つて聞かせた。池田の妻も又、父ちやんは東京へ行つて、むづかしい本を讀んでくるんだよ、云つてきかせた。

そのころして居るうちに、秋も暮れて、十二月へ這入つた。本部の櫻の木はすっかり葉が落ちてしまつた。其年は震災があつてから三年目、世間は非常に不景氣だつた。それで街には年末大賣出しの用意で、所々に立看板などが立ち始めた。山村は體温計をふくらしなしながら、本部に居て色々事務をまひるし、池田は、演説會だとか大會だとか方々へ出かけるので静養するこゝではなかつた。名物のからつ風は日毎に強くなつて、庭の櫻の枝がヒューヒューと呻つた。

池田が下獄の日は遂に來た。十二月十七日の朝、まだうす暗いうちに池田は、いつも來る高等の迎へを受けた。其朝は山村も、川田も實家へ歸つてゐたので池田が一人だつた。

池田が高等に伴はれて警察へ行つてみるに、思ひ掛けなくも川田が居た。さうしたんだと聞くと、『昨晚あれに會ひ

獨房だつた。この一棟は全部一癖あるものばかりを入れて置く處で、亂暴をする者だとか、氣狂ひだとか、老人だとか、癪小便だとか、特殊のものばかりだつた。池田の左隣の窃盜前科三犯の男は、氣が變になる手當り次第に器物を叩きこわした。右隣の強盜罪で懲役十年といふ低能な老人は、前科何犯だ？、云つて聞くに、指を折つて八九犯までは數へるが、あゝは忘れてしまつた云つてゐた。

間もなく、窃盜三犯君と交代りに年頃五十近くで前科二十三犯といふのが池田の隣へ來た。池田は話し上手なこの男から、彼れの活動寫眞の様に變種種まじりなく、數寄をきわめた一代記を聞くこゝが面白くて退屈しのぎになつた。其年の冬は恐ろしく寒かつた。

寒さは日増しにつつた。間もなく監獄へも正月が來た。池田は僅か二た切れの餅に、樂しがるべき社會の正月のこゝを憶んだ。そして暖くなるこゝばかり待つてゐた。

二月もまだ寒かつた。三月になつた。監獄の庭の櫻が咲いて、窓の下のはこが芽を出した。なんまなく春の訪れてくる氣配が牢舎の中にも感じられた。

三月末の或る靜かな日の午後だつた。池田は話しにも、讀書にも飽きて、ぼんやり腹想にふけつてゐた。するに、塀の外を大勢の小學校の生徒らしいのが通るガヤ／＼といふ聲と足音とが耳に這入つた。池田は

に行こうと思つて家の方の驛から汽車に乗つたところ、この停車場に刑事が待つてゐる途中を下ろされちやつたんだ、そして昨晩は警察へ泊つたんだ、といふのであつた。

川田には兼ねて一人の女があつた。女は或町の大きい料理屋に勤めてゐる女中であつたが、フトした機會から川田と知る様になり、川田の社會運動者である處や、その爲に入獄する身である事なきに同情したのが、二人は遂に相思の仲になつた。そして刑の方がすんだら二人が一緒にゐる約束になつた。そこで川田は入獄の日も決まつたので彼女に別れを告ぐべくあひに出かけたのであつた。

ところが、警察の方では、若しや女にひかされて逃走でもされては困ると思つて途中で下ろして留置したのであつた。

川田はあつて心ゆくばかり語り合はふとして、あひなかつた二人の心事を思つて可哀想になつた。それでもあきらめの良い川田は愚痴を言はなかつた。

それから池田と川田の二人は検事局へ行つた。検事局へ行つてみるに山村も來て居た。其處で三人が一緒にやつて愈刑務所へ行くこゝになつた。検事局からは見送りに來てくれた、同志の大林、吉田、池田の妻なき多數にまもられて、固い握手を名残りに二年振り監獄の門をくゞつた。池田の入れられた監房は一棟が二十三房に仕切られてゐる

フト自分が入獄する前に、子供が描いて來た寫生畫のこゝを思ひ出した。そして急に子供のこゝが思はれた。こゝに依つたらへいの外を通る生徒の中にも自分の子供も居るのぢやないかしら？、

そして先生が『監獄といふのは……』なんて説明してゐるのぢやないかしら？、

こんなこゝを考へて、池田は急に、言へ知れない暗い氣持になつた。(終)

池田は話しにも、讀書にも飽きて、ぼんやり腹想にふけつてゐた。するに、塀の外を大勢の小學校の生徒らしいのが通るガヤ／＼といふ聲と足音とが耳に這入つた。池田は



小説

がんばる

大野 金治

1. 源 さ ん

頑張屋、陰謀屋、宣傳屋、これは階級運動の三拍子だ。云はれてゐる。何所の組合いても政黨にても、たゞ三拍子は揃はなくともその中の一拍子や二拍子はキツトあるものだ。

さて、A農民組合に源さんなる人がゐて、頑張屋で通つてゐる。もう直き三十になるだらう。なりこそ小さいが、臆つ玉の大きい落付いた男で、尤もよく見るミ少々必要以上で落付き過ぎてゐる動作があまり敏活でないのが玉にキズらしく思へる。まア暗から牛を牽出すほぎでもあるまいが、晝間運送牛を引いてゐるくらゐなマダマルコキを符合はしてゐるのだと思へば間違ひはない。だが、その理合せにて

2. がん張り甲斐があるぞ!

兎に角、去年の霜害には俺アがん張つたもんだ。おいおいさう笑ふねえ、何うも俺はかう切り出さねえちや話がかまく出来ねんだ。

何しろおらが村ミ来た日にや、此の附近で一審ひびくやられちやつて、村の桑畑で青い葉の付いてる所ミ云つたら半分位しかねえ。あゝは眞ッ黒けにやられちやつたんだから俺達小作人の心が霜を喰らつた桑の葉よりもつこしよけ返つたのも無理もな話。だが、今時の小作人が「霜を喰らひました、へい!」

「云つてたんぢや生きちやゆかれねえ。組合ぢや早速その晩會合をぶつたもんだ。その時分の組合ミ云つたらみんなも知つる通り小つぽげなもんで組合員ミ云つたら十人位のもんだつた。今でこそ四十人も組合員があるが、それは此の霜でがん張つたお蔭なんだ。さてその晩の會合では、今年の小作人は半分にしやうミ云ふ事を申合せた。半分ミ云ふ一寸無理のやうにも聞こえるが、折角掃いた春蠶は半分も捨てなげりやなんねえ始末だからそれが當り前なんだ。それから組合に入らねえ小作人を出来るだけ引入れ

も云ふのか、喋る事は人並以上にがん張る。だから源さんが、

「あの時は俺アがん張つたもんだ。」

を初める。いくら暇な時でも大抵の同志が「そら! 源さんのがん張つたが初まつたぞ!」

「尻に帆をあげざるを得ないのだ。いゝ面をしてゐるやうものなら何度か聞かされた手柄話のムシ返して少くも三十分位は損をして丁了。源さんの話はいつても「俺アがん張つたもんだ」が前置になつてゐるので馴れた同志は此の前置を尻に帆をあげざるを得ない。こゝろが源さんがん張屋の名のある所以のだらうが、事實源さんは動作こそ牛の如く鈍い所もあるが、がん張る段になるミ又牛の如く口先だけでなくネバリ強く運動する。

と一緒に争論ぶつこ。そんなこゝは云ふだけア野暮云ふもんだ。て、鷲が小さい中に云ふんで、その次の日から十人の組合員が小作人の狙ひ打ちを初めた。言ひわすれたが、此の村ミ来たら知つての通り、會の裏見てえな處で、古野で地主が縣會議員に出てゐる位だから、およその事はわかるだんべえ。かう云ふ俺なんても、恥づかしい話だが、二年程前までは、手前が何うして喰ふするのかも知らねえ。

「俺が家は祖父さまの代から、會だ!」

なんて威張つてゐたもんだ。今でもこんなこゝをぬかす奴が大分あるから情ねえもんさ。そんなわけで随分組合へ入れるに骨を折つたもんだが、暮しの苦しいつて奴は百年考へるよりも効能のある薬だミ見えて兎に角五十人ばかりましまつたね。お蔭のその中には今まで組合ミ云ふものを理解しねえ唯恐ろしがつてゐる縣會議員の古野の小作人が二十人もゐるんだから、がんばり甲斐があるもんだ。そこで幹部一同腕にヨリをかけて、古野の言葉ぢやねえが、むやみに不逞ぶりを發揮してアチツたね。

3. 二匹の狐の會話

さて、これらが俺のがんばつた話なんだ。さうなるミ古野の奴ぢつしてゐられなくなつて。忘れもしねえ、俺が野良へ出べえと思つて、古野の邸の少し手前まで通りか

るミ丁度洋服で外出姿をした古野ミ、鞆持の禿頭の木村ミが門を出た處だつた。奴等は俺には気が付かねえ、誰もねえと思つて普通の聲で何か話乍ら縣道を直市の方へ歩いて行くんだ。

「此奴等又噂な事を話してやすめえ、よし聞けるだけ聞いてやれ!」

「思つて俺は二人の跡から一間ばかり離れてついて行つた。野良へ出る仕度をして足袋履なんだから足音がする氣遣ひなした。それに奴等は奴等て話に夢中になつてゐるんだから、全く何うも都合よく出来てゐるやがる。二人の話は、まアざつこい調子だ。『家の小作人に限つて、奴等の煽動に乗るやうな者はよいと思つてゐたのが此方の油断だつた。一人や二人なら兎に角、二十人ミ云へば三分の二だ。それが今年の小作料五割減を要求するに至つては、恩も義理も知らぬ仕打だ! 一體、木村、君にした處で、こんなに騒ぎが大きくなるまで權はんで置こ云ふ法はないぢやないか?』

「いや、わしもその古野家の小作人に限つて、そんな馬鹿な事が思つてゐたのが、そもく千慮の一失でしてね、何ミも申辨のない次第なんだして!」

「兎に角、僕は今日これから縣廳へ行つて、知事なり内務部長なり、早速村の桑畑を視察に来るやうに交渉するつもりだ。」

4. 追 拂

その日のひる過ぎ、村の入口の縣道に面した菓子屋の店先で、色々な與太をあげ乍ら俺は夕暮までがんばつた。つまり見はりをしたつてわけさ。木村ツて云ふ古狐がM市から歸つて来るミ組合を荒しやがるからね。もう少し暗くなる頃、禿頭はやつて来たね。親狐にふるまつて貰つたんだと見えて、ふだんせえ赤い面をまるめて天狗の面の様にしたるやがつた。野郎を連り過して置いて、三間ばかり後から俺が足音を忍ばせてついて行くミ知らねえ。野郎、自分の家の方へ歸らずに古野の小作人組合員の澤山なる鳥山部落の方へ行くてねえか。

「こりやいよく、奥の手を出しに来やがつた!」

「思つてゐるミ、案に違はず野郎め組合員の英さんの家のカイドを入りやがつた。『こりや面白、面の皮ひんむいてくれべえ!』俺は突嗟にう思つて、野郎ミは反對に裏口から一足先へ英さんの家へ入つて、もうミつくから來てゐたやうな顔をして白ばくされてゐるミ、直ぐやつて来た。『今晚は、英さんのたかね?』

「するミ、何んな事になるんぞ?」

「察しがわるいね、だから今度のやうな事になるんだ。キツてゐるてはな、知事や内務部長に何が出来る。唯連れて來て縣當局も同情に堪えない、何んか對策を講ずるから學村一致協力して調劑に苦難を切抜けるやうに云ふ事を宣傳させて、小作人を有難がらせるんだ!」

「成程、そりや、考へて!」

「君はM市で用を濟ましたら村へ歸つて早速うまく小作人に此の事を宣傳するんだ!」

「それだけぢや駄目だ、まだある。今日は、會支部の幹部會がある。その席上多分から云ふこゝになると思ふね。つまり、今年の霜害は、損害莫大だから救済のために今月納期になつてゐる縣稅家屋稅ミ附加税を秋の納期まで延期することを縣に進言する事になる。その外にも新規低利資金の融通や前に貸した低利資金の返済延期などがあると思ふが、かう云ふのは小作人にはあまり關係がないから、税金を延期するミ云ふ事を觸れ廻らんだ。よく云つておくが、唯それだけを觸れ廻つたのぢや駄目だ、會では百姓のこゝろを思つてかう云ふことをしてくるだから組合になさ入つて村の平和を亂さず開導してやつた方がいゝ、云ふ事力を入れるんだ。わかつたらうね?」

「へえ、その邊の處はもうぬかりはございせんて!」

「あゝ、たよ、まア上がつてくんな!」

英さんにさう云はれて、のく上がつて來たが、ふミ俺の顔見てびくつしたやうだつたが、そこは圖々しいもんで、づかづか俺ミ英さんの圍んでゐる煙草盆の外へ來たね。

もあつたのだ。
だから彼はお葉のこゝみを通して近づいたお祭の夜が餘計に待遠しかつた。

祭の夜——きつと賑やかな人出だらう。多く集る人々の中から目立つて美しいお葉の姿を見つけたして杉森の暗がり誘つて、そのばんはきつと切ない自分の思ひを打ち明けて見る。その戦術……若し彼にはさうした陰謀が考へられずには居なかつた。

「義男——早くせよ、早く刈んねえさ、お祭までには刈り切れねえもんな」

さう云ふ親父の聲に義男は、はつと我に歸つて陸稻をつかみつ、搦つて刈つて擡げると擡げられた陸稻は秋陽にパチパチ音して乾いた。

西に傾いた陽は彼等親父の影を細長く大地に描いてゐた

「義公よ！俺あ、早くしまつてぐからな」

一畦がきりがつく佐兵衛は腰を叩きながら義男を振り向いて義男に云つた。

義男は一寸顔だけあけて「あ、返事だけして、ちよりく」陸稻を刈つた。

「社總代の會談だちめがし、舞連中三棒使ひの喧嘩の手打ちだんべえや」

こしから取つた煙管にマッチを磨つた佐兵衛は氣嫌よさげに陸稻を刈る俵を見下して、義男が大きくなつて仕事か捗のだった。

「おい、随分縁ぐんだなあ」

義男の働いてる後に立つてさう云ふのは村木俊吉だつた。村木はお葉の従兄にあつて居た。

「俊ちゃんか？」

驚いたやうな調子で義男は云つた。

「はあ、お祭が近づいたな」村木は話した。

「まあ、義やん、こしをおろして話さねえか」村木は續けて云ひながら知られた陸稻案の上をこしを落つて居た。

義男も陸稻刈りをやめて村木の側に陣取つて云つた。

「お葉ちゃん、東京へいつたつて」

「うん……」

村木は氣無げに答へて、下を俯向いてしばらく何も云はなかつた。

お葉は村木の戀人だつたが、村木に愛想を盡してか、それとも村が嫌になつたのか東京の空を慕つていつてしまつたのだつた。そこで村木は失戀の苦しみを當させられ女の無情を怨みながら淋しく働いて居た。

「女なんちゆ者は駄目だ」
暫くたつて村木は云つた。
「だけど、お葉ちゃんみたいなの、離りした女は、女でも駄目ぢやなかんべえ」
義男は村木の隙を覗つて、お葉の話を持ちだして自分

のを自慢でも思つてるのか黄色い齒をだしてばつと煙を吐く。
佐兵衛は鎮守様の社總代だつた。義男が大きくなつて手があるで村の皆が選挙の時彼に社總代を押しつけたのだつた。

義男も一畦刈り終るに立ち上つて佐兵衛に云つた。

「早くしまつて往ねえかい、陸稻刈りは草臥れるから湯でも入つて……」

「うむ、ぢや俺は、これしてしまふ事にすべえや、手前も今日は大分捗つたから早くしまひな」

佐兵衛はさう云ひ残して疲れた足を重たげに引つて家の方を指して出かけた。

親父が行つて了ふ義男はお葉のこゝみがまた心に蘇つてきた。けれどもさうかかするに陸稻を刈る手が反つて鎌がゴム底の先きに當つた。お葉に手紙を書いて見たら……

「……」

「……」

若し手紙を書くにしたらさう具合に書き始めよう「お葉、なりましたねえ、僕は……」そんなふうに書いていたらい、か、それとも短く「私は、私は貴女様にお話ししたい事があるんですけれどお祭のばん……」さう書いたら結果はさうなるだらう？ 義男さう云ふふうの結果まで考へてくるお葉に手紙を書く氣持ちは雲のやうに消えてしまふ

の苦しい心を打ち明けようさめて居たので村木の言葉は義男にさう云はせるに丁度よかつた。
「おえふか？ おえふだつて矢つぱり駄目さあ、おえふだつて、夏ちゃんのやうに村の青年は好かねえからな」
義男は面喰つた。村木はおえふだけは離りしてさう云ふだらうさ考へて居たのに、すつかり裏切られてしまつた。
「おえふちゃん、何んで駄目なんだや」
彼はさう村木に聞かずに居られなかつた。
「何んでたつて、おえふの尻にもい、んがあるんだからな」
「い、んさ、一體そら誰だや」
義男はせき込んで云つた。
「何んでも、東京の大學生だちゆう話だが、あんな尻ても面が少しい、べえて、大學生が惚るなんて女でなければ駄目だ」
村木は白あげにちえつと、睡をした。
義男は何も云ふ事は出来なかつた。大きな恥辱を感じたそして一時に血が頭の方へ逆上してくるのを感じた。夕陽を浴びた鴉が柿山の方に啼くのが黄昏の靜かな空気を破つて聞える。
義男は淋しかつた。
「義やんよ、お祭の夜にはしつかりやるべえぞ、なあ、女なんか捨場に困るはさある世の中だわ、何も悲観する事はねえ」
村木は嫌いて笑つた。義男はそれが癪だつた。
おえふはもう駄目なんだ、他人のものなんだ。
だけど一言も胸の苦しみを、悶えを明さずに別れなければならぬのは義男には物足らないやうにも思つた。
村木が歸つた後でも義男はおえふのこゝみ、村木が云つたこゝみが針を射すやうに感じられた。だが、さうであつても胸に浮ぶのは或る夏のばんの事だつた。沼べりに夕涼に出た時、おえふは義男の居る所へ来ていろ／＼の話をした。彼にはその夜の彼女の手の温みを忘れる事は出来なかつた。そして「正しい人であつて下さい。さうすれば……」と微笑に思はせ振つたおえふの微笑がうかんで来た。村木が何ん云ふは他人を憐れおえふぢやないかと思つた。
靜かに黄昏た秋の野山は薄紫の水蒸氣に包れながら犬の遠吠えに暮れていつた。

お祭の夜が来た。

義男は二十分餘りも杉森の中の小高い丘の上に来てお葉を待つて居た。だがお葉の姿は見えなかつた。うなだれた芒の穂が樹蔭を連れてくる月影に銀色に光つた。風もないのに木の葉はバラ／＼音して散る。その度に彼はお葉が来たのぢやないかさ振りかへつて見たりした。女の來るのを待つて苦しいものだ、彼は心でつぶやいて、亂舞

堆らなくなつてお葉はさう云つた。
「お葉ちゃん！」
「何？」
「お葉ちゃんは百姓の青年は嫌ひでせう。」
「さうして出し抜けてそんなこゝ仰言るの」
「嫌ひなでせう」
「い、え」
彼女はつ、まじやかに云つた。
「でも、私は大嫌ひでせうねえ」
義男は思切つて云ふべき事を云つてしまつた。
「そんな事ないわ」
「だがお葉ちゃんには東京の大學生に戀人があるんだつて本當なかい」
「い、え、東京の大學生へ出てる人に同志は居るけど戀人なんかに居ないわ、……」
お葉は馬鹿々々しくなつて義男の肩から手を下して樹間の月影の方に顔を反向け白々しく微笑んで居た。
「私は元氣を出して思つてる事を云つてしまひますが、氣に障つても怒らないで下さい。」と前置きして義男は乾いた唇を舌で濡した。
「あたし、こんな事を申されても、怒るなんてやめましますわ、コンミニストは感情を爆發させるこゝは餘計慎しまねばいけませんから」

する血潮を押へるやうに胸に手を押し當たり、樹の間の月光に薄い星を見つめたりした。獅子舞の笛、大鼓が苦しさに振へる心臓に恐ろしく、悲しく、楽しく波打つやうだ。丁度女を待ち詫びる義男の胸に。
お葉は本當にこの杉森の中の丘に来てくれるさ書いて寄越したのに、或ひは偽つたのかも知れないさ憶息もしたりとお葉の姿が五分三厘ないうちにこの丘に現れるやうにも思へた。
戀する者は馬鹿だ！こんな苦しみを七日も續けた日には人間は必ず死ぬかも知れないさ彼はいく度も繰り返して、繰り返して頭を抱へて、その草群に倒れるやう突伏して居た。その時、草群を分けて、落葉を踏んで來る人の氣配がした。
義男はお葉ぢやないかと思つて立上つて見た。それは月光に正しくお葉だつた。
お葉は小足に走つて近づいてくる。
義男は氣まづかつたのでお葉に背を向けて立つて居た。しばらく経つてお葉は義男の肩に軽く手をかけて居た。
「義男さん!! あの出つて何!!! そんなに黙つて居なかつたつてい、ぢやないの」
「……」
義男は黙つて口を開かなかつた。
「何か云つて下さい」

コンミニストなき、義男は云はれてもその譯は解らなかつた。
「私は、ずつと前からお葉ちゃんを戀してきたくてすけれど、お葉ちゃんは私を愛してくれる氣持ちはないか、それを聞きたいんです。」
「……」
彼女は黙つて居た。月光を浴びた臙人形のやうなお葉の美しい顔だつた。
「義男さん、私たちはそんな話らないお話はやめにいたしませう。私たちプロレタリアには戀なんつて問題ぢやないでせう。ただ地主と資本家と如何に闘ひ、如何にして彼等に勝利を得るかさ云ふ事こそが問題なんですものねえ」
彼女は健けにもさう云ひ切つて義男の手を取つて、熱い接吻をした。
「何をするんだ、剛畜生!!」義男は云ひ様、彼女の手を振り拂つた。
彼女、あつげにさらされて義男の顔を見た。義男は泣いて居たのだつた。涙が月に光つて居た。男なんつてものは、そんな位で泣くぢやないさ云はうと思つたが、彼女は階級意識に見覺めない義男の姿を見るさ氣の毒で一言も云へなかつた。
祭の夜が明ける頃、村には二つの事件が起つた、それは

お葉は淋しかつた。
「義やんよ、お祭の夜にはしつかりやるべえぞ、なあ、女なんか捨場に困るはさある世の中だわ、何も悲観する事は

お葉は淋しかつた。
「義やんよ、お祭の夜にはしつかりやるべえぞ、なあ、女なんか捨場に困るはさある世の中だわ、何も悲観する事は